

〈解答〉

- ① 1 いて
 2 「例」海賊と戦う力がなく、きつと殺されるに違いないと思ったから。(29字)
 3 イ
 4 ウ
 5 オ

配点 ①各2点 10点満点

〈解説〉

① 「十訓抄」は、鎌倉時代中期に成立した、三巻からなる説話集。筆者(编者)は未詳。年少者の啓蒙を目的に、中国の説話を含む二百八十余りの教訓的な説話が収録されており、その後の教訓書の先駆的な書物と評されるものである。

1 古文に出てくる独特の仮名である「ゐ」「ゑ」は、それぞれ「い」「え」に直す。
 2 傍線②の「二行前」にある「防ぎ戦ふに力なくて、今は疑ひなく殺されなむと思ひて(＝海賊に対して防戦する能力やすべもっていないため、『もはやまちがいなく自分殺されてしまうだろう』と思って)」の部分から、海賊と戦う手段や力がなく、殺されるに違いないと思った用光の心情が読み取れる。

3 傍線③の後に「おのおの静まりたる(＝皆が静まった)」とあるが、これは用光の演奏を聞くためで、海賊の頭領が、用光の演奏を聞くための準備を促した結果と言える。つまり、傍線③の海賊の頭領の言葉は、手下たちに「用光の演奏を聞くようではないか」と呼びかけていると推察できる。

4 傍線④は、揺れる船から出る音を抑えようとして、海賊たちが船を動かないように押さえている様子が表現されている。また傍線⑤で、涙を流しながら箏を演奏しているのは用光。
 5 ア「用光は、海賊たちが箏の音色に聞きほれている間に逃げ出すという計画を立て」、イ「(海賊たちは)箏で曲を演奏することを用光に強要した」、ウ「小調子という曲にまつわる物語を…語った」、エ「(海賊の)礼儀正しさに心を打たれたので、結局その罪を見逃してやった」の部分がそれぞれ適当ではない。

〔大意〕

用光という雅楽の演奏家があった。(船上で詩や音楽を楽しむ)舟遊びをするために京都から下り(それが終わって京都に)上っていたところ、どこやらの船着き場で(用光たちが乗った船に)海賊が襲いかかってきた。(用光は)弓矢のありがたからず、(海賊に対して)防戦する能力やすべももっていないため、「もはやまちがいなく(自分)殺されてしまうだろう」と思って、箏を取り出して、船の屋根の上に座り、「その者どもよ、こうなつてはもう仕方がない。(私が)数年来大切に思っている箏

箒の、小調子という曲を吹いてお聞かせしよう。『こんな事があつたなあ』と、（私の演奏を）後で物語にでもなさるがよい』と言つたので、海賊の頭領が、大きな声で、「お前たち、しばらく待て。（船の屋根の上にいる男が）あのように言っている。（あの者の）演奏を聞いてみよう』と言つたので、（海賊たちは揺れている）船を押さえ、皆が静まつたところで、用光は、「（人生で箒を演奏するのは）もう最後なのだなあ」と（感慨深く）思つたので、涙を流して、すばらしく澄んだ音色で（曲を）演奏した。その音色や曲調は、波の上に響きわたるよう（なすばらしさ）であり、海賊たちも静まりかえつて何も言葉が出なかつた。（用光の演奏を）十分に聞いて、曲が終わつた時に、先ほどの（海賊の頭領の）声で、「あなたの乗る船に狙いをつけて襲つたのだが、（あなたが演奏した）この曲の音色（のすばらしさ）に涙が落ち（るほど感動し）て気が変わった』と言って、（海賊は船を）漕いで去つて行つた。